

小野容照著

『帝国日本と朝鮮野球 憧憬とナショナリズムの隘路』

中央公論新社, 2017年

はじめに

日本と朝鮮半島の関係をスポーツから見るとどのように見えるのか。韓国では「克日」という言葉に示されるように日本に対する憧れと日本を乗り越えていこうとする国家的・国民的な意識や志向が社会に通底する観念として存在してきたことは否めない。スポーツにおける日韓戦の盛り上がりは、ときには両国民を心理的にも掻き立てる。そこはプライドとコンプレックスが交錯する場であり、その熱狂は、ときにスポーツを楽しむとする牧歌的な領域から人々を乖離させ、双方のナショナリズムを激しく刺激することにもなる。

スポーツにおける競技力の発展がとりわけ国際スポーツ大会などにおいて発揮されるとき、それは、ある国家や民族が想定される人々の間にナショナルな感覚を一過的ではあっても喚起させるきっかけにもなってきた。全世界に帝国主義が蔓延った時代、「ヤツらのゲームでヤツらを打ち負かす」という実践的な経験は被支配民族の人びとにとっては宗主国に対してナショナリズムを昂揚させる抵抗の象徴ともなり、生が保障される制度的な下での民族運動を代替することにもなりえたのである。

本書はそうした朝鮮人の実践的経験を野球に着目して展開する。だからと言って植民地期に展開された民族的抵抗やナショナリズムの昂揚に果たした野球の役割にだけ着目しているものではない。著者の視角は著書の副題にもあらわれているように「憧憬とナショナリズムの隘路」にあり、被支配民族として生きねばならなかった朝鮮人らの主体的な働きかけがあってこそ朝鮮半島の野球が発展したのであり、そこに朝鮮民族のナショナリ

ムのみならず、常に日本への憧れがひとつの力として存在していたのである。ただその憧れは植民地支配という現実と向き合わねばならなかった憧れであったがゆえに本書では日本の野球の影響、民族運動、植民地支配の三つの視角から朝鮮半島の野球が描かれる。

1. 本書の構成と内容

本書は序章と終章を合わせて七章で構成されており、それぞれの章テーマは以下の通りである。

- 序章 変化する野球用語
- 第一章 ベースボールの伝来と野球の普及——韓国併合前
- 第二章 暗黒時代——武断政治下の野球界
- 第三章 「民族の発展は壮健な身体から」——文化政治期の朝鮮野球界 (1)
- 第四章 帝国日本の野球イベント——文化政治期の朝鮮野球界 (2)
- 第五章 戦時期朝鮮の野球界
- 終章 植民地朝鮮の野球とは何だったのか

では各章の概要を以下にみてみよう。

序章では朝鮮半島に残る日本野球の影響を「野球 (야구)」という言葉あるいは野球用語から検討している。韓国・北朝鮮では解放後に国語の純化が進み、多くの外来語が廃止され野球用語も改定されたのだが、韓国・北朝鮮で定着してしまった膨大な量の日本式野球用語はすべてを排除できず、「野球」をはじめ多くの野球用語が朝鮮半島に残ったままとなったのである。

第一章では朝鮮半島への野球の伝播の問題を取

り上げる。先ずこれまで『大韓体育会史』によって韓国野球史で通説とされてきた「一九〇五年」説について史料的な根拠が不足していることから批判的な考察がなされている。

次に民族運動に寄与した徐載弼や尹致昊と野球との繋がりについて紹介している。二人に共通するのはアメリカへの留学であり、彼らはアメリカでベースボール（野球）を観戦・経験した最初の朝鮮人であった。一方、朝鮮半島においては1903年に皇城YMCAが設立され、大韓帝国の保護国化のなかで高まった愛国啓蒙運動を背景に体育・スポーツ、さらに野球が「民族の身体」の養成を目的に広がり、さらに大韓興学会の野球チームが母国を訪問して皇城YMCAと交流試合を行うなど、野球を通じた「愛国の精神を発奮」させ、朝鮮における野球とナショナリズムの結びつきは強化されていったのである。

第二章では武断政治下における朝鮮野球界の状況について述べられている。武断政治の下でのスポーツは著書で引用されている朴烈の回顧に最も端的にあらわれている。すなわち「学校は朝鮮人の競争心、敵愾心をおこさせないようにするため、一切の運動について対校試合に類するような遊戯を禁止した」のであり、朝鮮総督府はスポーツを取り締まりの対象と見なしていたのであった。

この二章においては日本人チーム対朝鮮人チームの対戦として典型的な試合が二試合紹介されている。一試合目が1913年4月の皇城YMCAと日本人チームの城南倶楽部との対戦である。この試合は7回に「興奮した大衆が行政上の取締りを要する」ことから警察署による中止が命じられ、城南倶楽部のコールド勝ちに終わったという。もう一つが1914年10月の龍山鉄道倶楽部と朝鮮人チームの五星倶楽部の試合である。先の城南倶楽部対皇城YMCAの再現とも言えるこの一戦は最終回到五星倶楽部のサヨナラ勝ちとなり、朝鮮人たちを歓喜させた。しかし、その姿に腹を立てた日本人観衆がグラウンドに乱入し、五星の選手らに暴行を加える事件が発生する。これをきっかけに総督府は朝鮮人と日本人との間に「対立的観念」を生み出す野球の試合を行わせないように各学校に野球大会への参加禁止を命じ、全国中等学校野

球大会朝鮮予選大会は武断政治期には開かれることはなかった。

第三章は文化政治期の朝鮮のスポーツ活動について記述されている。朝鮮半島における独立運動は外交活動、独立戦争、実力養成論の三つの戦略から成るが、スポーツに関わるのは三つ目の実力養成論であり、この「実力養成」が本章を貫くキーワードとなっている。

1919年の三・一独立運動をきっかけに総督府の政治は文化政治と呼ばれる「内鮮融和」をスローガンに打ち出した政治へと転換していく。朝鮮人のためのスポーツ振興を担う朝鮮体育会もこの時期に組織されている。文化政治期においても野球は朝鮮民族運動の柱であり、高等普通学校の培材、徴文、中央の三校は野球の強豪校として知られた。特に後者二校は日本に留学した朴錫胤、徐相国がそれぞれの学校で野球の指導をしており、日本仕込みの野球指導がなされたのだった。このように朝鮮人野球イベントの発展は日本野球の影響力を無視できないものであった。

第四章は引き続き文化政治期の朝鮮野球界について述べられている。この時期にきて漸く全国中等学校野球大会の朝鮮地区予選が1921年から許可され、第一回大会が開催される。朝鮮人のみのチームであった徴文高等普通学校は1923年の第三回大会で優勝し、全国大会への切符を手に入れたが、この徴文の活躍は「内鮮融和の上から見ても非常に結構なこと」だと報じられ、大阪朝日新聞社の内鮮融和政策への貢献は達成される。また朝鮮人私立学校の野球部は全朝鮮野球大会という民族的イベントよりも全国中等学校野球大会に価値を見出すことになる。

この四章において全国中等学校野球大会と並んで重視されている野球イベントが1927年8月に始まった都市対抗野球大会である。主催した大阪毎日新聞社は大阪朝日新聞社の全国中等学校野球大会に対抗する野球事業として都市対抗野球大会を手がけていく。またこの大会の重要な部分は中等教育機関で活躍した朝鮮人野球選手らの受け皿をつくり、その後の生活を野球によって保証しうる可能性を生み出したことにあった。

第五章は戦時期の朝鮮野球界を皇民化政策との

関係から述べ、最終的に朝鮮半島から野球が消えていったことについて触れている。1939年3月に開かれた「国防と体育に関する座談会」で座長を務めた塩原時三郎は「体育の目的は最高の戦力を獲得」することにあることを明言し、競技としてのスポーツは否定されていく。これにより、総督府学務局は各学校における選手制度の廃止をひとつの政策とし、直接的には各学校の校長の判断により甲子園大会を目指す野球部はその活動に制限が加えられることになっていったのである。社会人野球も同様に縮小していき、1942年9月の秋のリーグ戦をもって朝鮮半島における野球イベントは幕を閉じたのであった。

2. 本書の特徴

これまで内容の概要をみてきたように本書は朝鮮半島における野球の定着・普及を単純な植民地支配の結果（＝帝国主義的な押しつけ）として理解するのではなく、日本の影響を受けつつも、野球が朝鮮人の民族運動（実力養成論）と結びつきながら朝鮮人自身が関与していった点に着目している。他の競技ではなく、日本と縁の深い野球に着目することでこの複層的な部分が成功的に描かれている点は本書における最も大きな特徴と言える。加えてこれまできちんと整理されていなかった朝鮮野球史における朝鮮野球起源の特定、独立運動・民族運動家との関わりを、丹念な資料収集と批判的検討によって実証的に描き出すとともに、植民地朝鮮における人物や学校、各種運動・スポーツ団体の変遷やその後の状況が丁寧に整理されている。ゆえに本書は朝鮮近代史、スポーツ史はもちろんのこと、部活動という視点から教育史にも貢献する著書であることは明らかであろう。

本書のクライマックスは第四章にある。文化政治期の朝鮮野球はまさに「憧憬とナショナリズム」のなかで展開された。しかし、第五章になるとナショナリズムの側面は色を失う。すなわち皇民化政策、朝鮮半島の総動員体制の下で野球とナショナリズムは影を潜めることになったのである。ここでの記述は抑圧の歴史として植民地政策の影響をなぞらざるを得ず、朝鮮半島における「野球」というひとつの競技を対象としたときの限界にも

なっている。確かに戦時の総動員体制の下では野球を含むあらゆるスポーツ競技は禁じられていった。朝鮮半島を対象とするスポーツ史研究において、この時代は語られず、体育・スポーツが軍事訓練化したことに触れるのみである。『大韓体育会90年史』においてもこの部分の記述はぼかりと空いている。朝鮮民族が独立に向かう物語の一切をこの時空間に見出すことができないため、歴史として扱われない時代となっているのである。

しかし、この時代のスポーツは「スポーツ」の概念規定によって見方が変わってくる。ゆえに「スポーツ」をより広義のものとして捉えた場合、競技に特化した「スポーツ」概念では掬えない様々な事象が取りこぼされていることに気付くだろう。文化政治期に朝鮮知識人らが「実力養成」に期待したのはまずは朝鮮民族の「身体」であり、衛生的で強健な身体への志向がまずは重要である。そのため民族運動の文化的活動の柱であったとしても「野球」というひとつの競技への接続は若干論が飛躍する。また塩原がわざわざ「国防と体育に関する座談会」を開いて主張したことは競技を否定することにだけ目的があったわけではない。その後の朝鮮半島の体制のなかに朝鮮人の「身体」をどのように組み込んでいくのかを議論したのである。すなわちこれらの観点を「野球」にだけ収束させていく論理構成は、既存のスポーツ史、広義の「スポーツ」概念に対する大きなアンチ・テーゼとまでは成りにくくなっている点是否めないのである。

また本書の特徴でもある「憧憬」という視角は実はスポーツと政治の関係をうまく切り離す役割を果たしている点にも注意を払っておきたい。帝国日本にとって野球は非公式的な手段のひとつとして植民地支配の影響力を強めたことが本書から読み取れる。帝国のもとでのスポーツは決して政治的にイノセントな状態で存在しえない、にもかかわらず、朝鮮人の日本野球への「憧憬」はナショナリズムによる対抗的な部分は残しつつも植民地空間に漂う全体的な支配の雰囲気を受容的に受け入れ、支配という呪縛から彼らを解き放っているように感じる。近代性を帯びたスポーツは植民地社会を制度的に近代化させようとする植民地政策

との親和性が強い。すなわち植民地社会に近代性が必要だと認識した一部の朝鮮知識人らの志向性と植民地政策の作為・不作為の一致は、朝鮮民族を主導し、総動員体制に寄与した人々を免責することに繋がってしまっている。彼らは「憧憬」という言葉に押しとどめられることによってその行為の政治性、すなわち対日協力行為について言及されることのない者に据え置かれることとなるのである。

以上のように本書は植民地期の朝鮮半島における「野球」を切り口にして、植民地朝鮮における

新たな議論の糸口を提示した。スポーツと朝鮮民族のナショナリズムに言及した研究はいくつか散見されるものの、単純なナショナリズム論にのみ墮してしまう研究がほとんどであり、ここまで丁寧に論を組み立てて、複層的な論理を構成した研究はなかった。ゆえに対象に含まれる分野への本書の貢献は日本と朝鮮半島の両地域において大きなものがある。本稿で記述してきた本書の限界を把握しつつ、更なる議論が期待されよう。

(金誠 札幌大学)